O3-025

乳幼児健診利用者の現状調査

佐竹留美子[1]、小川恵理子[1]、小澤　美和[2]
[1]聖路加国際病院　小児科看護師
[2]聖路加国際病院　小児科医師

【背景】
当院の保健師が実施する乳幼児健診における指導では、乳幼児が健やかに成長するための生活習慣の構築、社会性の獲得を目的とした保健師の視点からの育児指導を主に行う。今回、近年の乳幼児の生活の現状、養育者視点での育児の困難感を調査し、育児指導において必要な内容の再考をしたいと考えた。
【目的】
乳幼児健診を利用する親子の生活状況を可視化し、今後の健診・指導に反映させることを目的とする。
【方法】
2024年1月に健診を利用した患者のアンケートを用いてクロス集計を行った。
倫理的配慮：情報利用拒否をしなかった患者の電子カルテ情報等を使用し、個人が特定できないよう加工した。
【結果】
3か月から4歳までの302名。男児135名、女児166名。
1．栄養：乳児期の完全母乳栄養の割合は約20%、3か月児では混合栄養が全体の60%を占めた。離乳食は6か月児で94%が開始し、1歳児の平均食事回数は3.8回であった。食物アレルギーの懸念は全体の9%であった。1歳半以降、約半数が子どもの食行動の特性を指摘し、4歳児では全例が食事に何らかの配慮を行っていた。2．排せつ：約20%が排便困難感を指摘した。3．睡眠：起床時間は平均して7時頃であったが、就寝時間は20～22時と幅があった。4．集団保育：1歳で約30%、2歳で約80%、3歳で100%の子どもが利用していた。5．動画視聴：3か月児で約10%、2歳児で約90%、3歳児では約70%と減少した。6．外傷：3歳児が最多で約30%、次いで1歳児で約20%であった。7．育児困難感：乳児期には20%前後、1歳から2歳では30%前後が何らかの困難があると訴えたが、3歳以降には全員が育児困難はないと回答した。
【考察】
・乳児早期から人工乳を利用し、離乳食の開始、完了への移行は順調であり、従来の育児指導が有用と考える。
・乳児期からの集団保育の利用は少ない一方、動画視聴が早期から始まっていることは、言語・社会性の発達への悪影響が懸念される。健康的な精神発達を促すためには、現代環境に見合った生活指導の工夫が必要と考える。
・排便困難や外傷既往のある乳幼児が一定数おり、指導に積極的に取り入れる必要があるだろう。
【結語】
乳幼児健診における指導は、従来の内容に加えて、動画視聴、排便習慣、事故予防に関する内容を積極的に取り入れる必要がある。

O3-026

山口県宇部市における生後2週間新生児健診の有用性の検証

高橋　一雅[1,3]、星出まどか[2,3]、長谷川俊史[1,3]
[1]山口大学医学部附属病院　総合周産期母子医療センター
[2]山口大学医学部　小児救急地域医療学講座
[3]口大学大学院医学系研究科　医学専攻小児科学講座

【緒言】
山口県宇部市では、2016年度から生後2週間新生児相談事業（2週間健診）を開始した。山口大学医学部附属病院（以下、当院と略）は常勤小児科医が勤務する宇部医療圏唯一の施設で、地域の医療に貢献することも使命の一つである。このたび、山口県宇部市における2週間健診の有用性を検討したので報告する。
【方法】
2016年4月から2022年3月までの期間に当院小児科外来に紹介された新生児208名を対象に、カルテよりデータを抽出して後方視的検討を行なった。本研究は当院倫理委員会承認後(No. 2022-099)に実施した。
【結果】
小児科開業医からの紹介で当院を受診した新生児186名のうち、地元の小児科開業医で2週間健診が行われ要精査と判断された新生児は38名であった（A群）。A群の主な紹介理由は、心雑音（n=25）、消化器症状（n=4）、黄疸（n=3）、その他（n=6）であった。A群の心雑音で紹介された25名の診断は、心室中隔欠損症（n=5）、心房中隔欠損症（n=5）、肺動脈弁狭窄（n=3）、完全型房室中隔欠損症（n=1）、大動脈弁狭窄症（n=1）、大動脈肺動脈窓（n=1）、動脈管開存症（n=1）、無害性雑音（n=8）であった。また、黄疸が持続した2名の新生児のうち、1名は胆道閉鎖症と診断された。2週間健診以外で当院を紹介受診した新生児は148名であった（B群）。B群の紹介理由は、新生児マススクリーニング検査二次精査目的（n=31）、心雑音（n=29）、発熱（n=25）、呼吸器症状（n=17）、外性器異常（n=11）、消化器症状（n=14）、皮膚症状（n=9）、腎盂拡大（n=8）、神経学的症状（n=3）、遷延性黄疸（n=2）、その他（n=5）であった。AB両群間で紹介日齢、妊娠期間、出生体重、性別に有意な差はみられなかった。心雑音が聴取された25名のうち5名の児(A群4名、B群の1名)は心不全と診断され、利尿薬投与、パリビズマブ注射などの医療的介入が必要であった。
【考察】
山口県の先天性心疾患の胎児期診断率は他県に比して低いと報告されている。心疾患の早期発見のためには宇部市だけでなく、山口県全体で2週間健診を実施することが有用ではないかと考えられた。
【結語】
宇部市2週間健診は先天性心疾患の早期発見に有用で、山口県全体での実施が望まれる。

Presented by Medical*Online